女性文学としての時代小説：戦後の女性作家の作品を中心に

李, 紹楠 / LI, Shaonan

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第562号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026680>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	李 紹楠
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 816 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 小林 ふみ子 副査 教授 中沢 けい 副査（学外）日本女子大学兼任講師 藤木 直実

女性文学としての時代小説
——戦後の女性作家の作品を中心に——

この論文の方法と意義

本論文は、長らく男性作家に占められていた時代小説の分野に、第二次大戦後、徐々に女性作家が進出したことによって、それまでにはないさまざまな傾向をもつ作品が生みだされたことに着目し、それらの作品群の俯瞰を試みるものである。

舞台を過去の時代に設定して虚構の作品世界を作る時代小説は、歴史上の実在の人物をモデルとする歴史小説と並んで、大衆文学として純文学と区別されてきた。序章において論者が整理しているように、「大衆」と「女性」という二重の周縁性を帯びているために、女性による時代小説は、長らく文学研究の俎上に載ってこなかった。近年は、大衆文化の再評価によってさまざまなジャンルの作品が研究の俎上に載せられるようになりつつあり、本研究もまずはそうした潮流に位置づけられる。

この論考は、1950 年代から 2000 年代までにデビューした 6 人の女性作家を取り上げ、その総体としての特徴と、個別の特徴を精緻に考察する。その問題意識はフェミニズム文学批評の立場から、なぜ女性作家が、家父長制のもとで女性たちが抑圧されていた時代を舞台として創作したのかという点に核心がある。本論文ではこの問題を解明するために作家 6 名の作品ないし作品群をとりあげ、それぞれの活躍期によって三部に分けて論じる。歴代の男性作家の作風が剣豪小説や捕物帳に偏りがちであったのに比べ、女性作家たちがそうした時代にあってなお自立的に生きる、あるいは現代人さながらに等身大の日常を送り、今日も女性がなお抱える問題に向きあう姿を多様な角度から描き出していることを明らかにしている。前近代という舞台はそうした人物像を逆説的に強調する設定であろうが、本論文では、女性が時代小説を手がけることが、男性による男性の歴史の再生産であった時代小説というジャンルのあり方そのものに異議を申し立てるものであったと結論づける。

本論文は男性による従来の（時代）小説とは異なる「女性文学」としての側面と、一枚岩ではない各作品の多様性との両面を論究している。優れて独創的な着眼であり、女性作家による時代小説の作品を学術的・体系的に論じたまとまった成果として、大きな意義が認められるものである。付言すれば、文章が平易かつ要を得ており、論理展開がなめらかで、たいへん読みやすいことは、特筆すべき美点である。

論文の目次

序章

第一部 伝統に対する挑戦——50年代にデビューした作家たち

第一章 王朝文学からの継承と反逆—田辺聖子『王朝懶夢譚』—

第二章 女性主人公像の確立まで—平岩弓枝『江戸の娘』を中心に—

まとめ

第二部 新しい江戸像の展開——80年代にデビューした作家たち

第三章 江戸社会の片隅に向ける眼差し

—杉本章子「信太郎人情始末帖」シリーズ—

第四章 「半七捕物帳」シリーズの受容と再生

—宮部みゆき『本所深川ふしぎ帳』『幻色江戸ごよみ』—

まとめ

第三部 女性問題への注目——00年代以降にデビューした作家たち

第五章 女性の連帯の場としての吉原像—宮木あや子『花宵道中』—

第六章 ノスタルジーの幻想を超える女性画人像—朝井まかて『眩』—

まとめ

終章

それぞれの章の要旨と評価

序章

・概要

第二次世界大戦後、高学歴化によって女性作家が増加し、またフェミニズム文学批評の発展にともなって研究の対象とされる女性による作家・作品が拡大した。時代小説も例外ではなく多くの作品が生みだされてきたにもかかわらず、それらを含め大衆文学が研究の俎上に載せられてこなかったという問題を指摘し、大衆文化研究がさかんになりつつある今、本研究が女性作家による時代小説に注目することを掲げる。

その前提として大正期以来のその歴史をたどり、時代小説と截然と分けられるものではないが「必ずしも史実を忠実に再現するものではなく、多くは想像上の人物を主人公としているという認識が一般的」とであると定義する。戦後におけるこの分野における女性作家の活

躍と貢献の大きさ、それに対する研究の乏しさを指摘してその必要性を説く。

そのうえでこの課題にとり組むにあたっての問題意識として、2点を掲げる。1つは近年のフェミニズム文学批評の潮流をふまえ、女性であることのみにとらわれた一律の「女性性」に回収されない個性、多様性に注目することである。もう1点が、女性たちが抑圧されていた近世以前の家父長制社会がなぜそれらの作品の舞台として選ばれ、そこにどのような男性とは異なる視点、現代女性の投影が見られるのか、それがどのような新しい視座をもたらしたのかということである。これを示したうえで論文の構成を説明する。

・評価

本研究の対象とする戦後の女性作家による時代小説の作品群の重要性、大衆文学に光が当てられるようになった経緯、それを研究することの女性文学研究上の意義が明確に述べられている。対象群の大きさに対して6名の作品を選んだことに「異なる時代にデビューした代表的とみなしえる作家を各章で取り上げる」とするが、その選択について、論文の課題設定と関連させた説明がほしいところであった。

第一部 伝統に対する挑戦——50年代にデビューした作家たち

第一章 王朝文学からの継承と反逆—田辺聖子『王朝懶夢譚』—

・概要

芥川賞作家として出発しながら通俗に転じ、女性作家であるがゆえに「二重に差別」されてきたと自ら語る田辺の、王朝を舞台にしたオリジナル小説『王朝懶夢譚』（1995）を取り上げる。古典文学への愛着を語り、物語をはじめとする数々の作品の現代語訳を手がけた田辺の経験を活かした作品で、王朝時代の姫君が小天狗の助けを得て東国の青年との自立的な恋の道を選ぶという、一見、ファンタジックな筋立てをもつ。本章では、実はその背後に、『伊勢物語』『今昔物語集』『和泉式部日記』『とほずがたり』といった多数の古典文学の要素をちりばめて構成されていることを登場人物名や設定、展開を分析して指摘する。

そのうえで、恋愛を主軸とする王朝文学の型をあえて外し、親に定められた貴族社会での人生を脱出する生き方を主体的に選択する女性像をみる。そのような人物像には、芥川龍之介による古典解釈への批判が込められていると考察する。田辺が芥川風の「大正教養人的趣味」との差異化を示唆していることを手がかりに、貴族の少女の受動的な人生の悲劇を描いた「六の宮の姫君」（1922）の女性の造型を打ち破り、新たな王朝文学の受容の可能性を提示することを意図があったことを論じ、この作家の古典文学の豊富な知識を駆使して構想された作品と結論づける。

・評価

イルメラ・日地谷＝キルシュネライトとの対談、および、全集を整備した菅聡子による論考なども存在する田辺の作品分析を一章に置いたことは、本論全体の問題意識や方法論の明示にも繋がって効果的である。

当該作の典拠を特定し、田辺によるアダプテーションがそれをいかに再構築し、現代性と大衆性を獲得しているかを明らかにしている。典拠作品についての先行研究の調査と摂取も妥当であるとみなされ、田辺作品の読解も詳細である。また、田辺が意識していたという芥川龍之介の王朝物の特徴、さらに芥川「六の宮の姫君」に触発されたという山岸涼子の漫画「朱雀門」の特徴をも踏まえて、それらとは異なる田辺作品のヒロインの反逆性をより明確化している。

以上、本論の卓越性と意義および着眼の妥当性は認めたいうえで、しかし若干気にかかるのが、田辺を「50年代にデビューした」と見なし位置づけることの妥当性である。言い換えれば、田辺の90年代の作品を論じるにあたっては、その当時の時代状況との交差性をもう少し打ち出してもよかつたのではないか。また、「作者」概念が若干素朴なように感じられる箇所も散見された。

90年代の状況にかかわっては、当時の「少女」をめぐる議論の隆盛（本田和子、高原英理、橋本治など）や、氷室冴子の王朝物のヒット現象、『文車日記』を初めとする田辺作品が高校生の古典入門副読本的な受容を得ていたこと、また、文庫版『王朝懶夢譚』の装幀に触れるのであれば、「ジャケ買い」ブームを生んだ2000年代の「人間失格」や「蟹工船」の新装版のことなどにも目配りがあってもよかつたかと思う。

第二章 女性主人公像の確立まで—平岩弓枝『江戸の娘』を中心に—

・概要

小説に限らず、映画やドラマの脚本など多方面で活躍し、数多くの時代小説を手がけてきた斯界の代表的作家平岩弓枝（1932-）をとりあげる。平岩の時代小説のバックボーンとなる、平岩の生い立ち、男性の師匠たちおよび新鷹会とのつながり、平岩の現代小説およびテレビドラマ脚本について整理したのち、初期作を収めた7編からなる短編集『江戸の娘』（1979）のうち、女性の人物像が特徴的な5編を分析する。これが平岩の代表作として40年以上連載が続く「お宿かわせみ」シリーズへとつながる自立的な女性主人公像の確立へとつながっていくことを論じる。伝承や史実に取材する70年前後頃までの「鬼盗夜ばなし」「日野富子」「絵島の恋」ではあえて、従来の描かれ方とは異なる、主人公の女性の立場に立った新たな人物像を提示していること、大衆小説として、純文学の作家たちと追求した女性を抑圧する社会環境を暴き出すというテーマを共有していることを指摘する。さらに史料にわずかにみえるオランダ商館の奴隷が長崎の遊廓にいったことで処罰されたことから構想を膨らませた「出島阿蘭陀屋敷」（1965）については、有吉佐和子の『非色』（1963-64）が課題とした人種差別問題を背景に、時代小説のなかに問題点を探し出した作品と位置づける。江戸から明治へと移りかわる時代を舞台に虚構の登場人物『江戸の娘』（1975）は、恋を貫きみずから店を開いて明治の新時代を迎える女性像に、お見合いではなく恋愛結婚が主流となり、ひたすら働くことで高度成長期の豊かさを得たこの時代の、作家自身の理想的な女性像の到達点を見ると同時に、大衆文学らしい希望

あふれる積極的な人物像の確立をみる。これらに、それまで男性によって作られてきた時代小説の人物像に対する平岩の挑戦を見る章となっている。

・評価

初期の短編を収めた『江戸の娘』を論じて、古典文学や史実、および『御宿かわせみ』シリーズとの相関を整理する。当初の虚無的で破壊的な女性像は、70年代に入ると強い生命力をもった積極的人物造型に推移するが、論者はこれを、高度経済成長による戦後復興の完成、女性の社会進出、および、70年代フェミニズムと関連づけている。妥当な分析であると言える。なかでは「出島阿蘭陀屋敷」における外国人および混血児の表象に、有吉佐和子『非色』との同時代性を見いだす指摘がとりわけ鋭利である。

先述のとおり、第一章に田辺聖子作品を置いたことの意図は認めるものの、本論考が扱う作品の中でもっとも早いものがこの平岩作品であるので、これを先に配置するという選択もあっただろうと思う。加えて、同人誌から出発した田辺聖子の行程が戦後作家として標準的であると見なされるのに対して、代々木八幡の宮司という生家の環境のもと、友人の紹介で戸川幸夫に、戸川の推薦で長谷川伸に師事した平岩の経歴は前近代的であるとも言え、その意味でも、早い時期の女性時代小説家として、最初に検討してみても良かったのではないか。

平岩のバックボーンについては、論者もテレビドラマ脚本と有吉佐和子作品との同時代性に言及しているが、その2点は職業作家かつ時代小説作家としての平岩弓枝を生み出す背景としてより重視すべき事柄であるように思われる。いわゆる才女時代に登場した知的女性作家たちの存在、そのうちの有吉が時代物を手がけていること、また、テレビという「女子ども」向けのメディアの普及に伴って、佐多稲子や吉屋信子など既存の女性作家の作品がテレビドラマの原作として求められたこと、特に吉屋が時代物を手がけていることなど、それらの観点から、いわば「前史」を素描した一章を構想することもできるのではないだろうか。

以上の通時的視点に加えて、平岩をめぐるのは、同世代かつ歴史小説作家である永井路子および杉本苑子との共時的な対照も必要であるだろう。自立的な女性像の確立を考えると、多数の若い男性が戦死した戦後、多くの女性たちが一人で生きざるを得ない状況にあったという背景も見逃してはならない。世相の変化はたとえば『婦人公論』など雑誌への女性たちの投書によってある程度跡づけられよう。また、新鷹会という男性だけの環境のなかで、平岩が彼らから何を学び、いかにして自己を差異化したのか、そのあたりの事情も知りたく思われる。

「50年代」という括りについてはやはり疑問で、田辺の芥川賞受賞作が63年、平岩の直木賞受賞作が59年であってみれば、これらは「60年前後」くらいに見なすのが、二波フェミニズムとの相関という点からしても妥当なのではないだろうか。

第二部 新しい江戸像の展開——80年代にデビューした作家たち

第三章 江戸社会の片隅に向ける眼差し

—杉本章子「信太郎人情始末帖」シリーズ—

・概要

大学院で江戸文学を研究していた経歴を活かした緻密な近世日本社会の描写で知られた杉本章子（1953-2015）を代表的する作品として、作者が10年かけて36回連載した表題のシリーズ（1999-2008）を取り上げる。綿密な時代考証にもとづいたリアリティと、剣豪小説や捕物帖中心の従来時代の時代小説においてあまり注目されてこなかった文人や町人を取り上げた新しい視座による江戸の表象を読む。嘉永年間を舞台とする本作は、その時代を描いた時代小説における有名人物である遠山金四郎のようなカリスマやスーパーヒーローを登場させることはなく、「一種のアンチテーゼ」として勘当息子を主人公に置き、事件ののちも消えない彼のトラウマを描く。また、綿密な考証や江戸言葉の使用によって細部のリアリティを担保するのみならず、下層社会の多様な職業に従事する人々、大店間のネットワーク、小商人の生活、下級士族、など、とりわけ身分社会の片隅に置かれた人々を活写するとともに、各階層間の相互関連性を歴史研究の裏付けに基づいて描く。主人公の信太郎を視点として芝居小屋のバックヤードを描くのみならず、彼の実家への復帰＝階層の上昇移動に伴って、視座の推移も捉えている。登場人物の心情が直接描写されるのではなく、風景描写を通じて比喩的に描かれているのも特徴であるとする。また、火事と地震という二種類の災害を取り上げ、その状況や影響、庶民間の連携などを描きこんでいる。以上のように、多面的に江戸庶民の群像を描くことで、捕物帖という題材への対抗を示すとともに、エンターテインメントの性質を超えた写実性を備えた作品であると結論づける。

・評価

従来言われてきた杉本作品の綿密な考証性ということに加えて、スーパーヒーローへのアンチテーゼを読み取るところが新しく、女性文学としての本作の性質を明確化していると言える。「消えぬ過去」、トラウマ、階層、風景、移動、災害など、近現代文学作品を讀解するうえでの視座を巧みに用いて、本作の文学的卓越性を捉え得ている。ただ、芝居小屋そのものに入出入りするの基本的には識字層であって最下層ではなく、身分階層の羈絆を脱して行動できる、作者としては描きやすい設定を選んでいることも見逃してはならない。また杉本作品の解説などを手がかりとしてそれを論じるうえで引用した江戸の都市史研究の論考が、80年代以降、政治史よりも社会史に重点を移していった日本近世史研究そのものの動向を背景とすることも指摘してもよく、そのうえでこうした歴史学研究との連動がこの作者一人の固有のことなのか、同時代の作家にも多少なりとも見られることなのか、その後におけるこうした手法の継承も含め、なんらかの位置づけがほしいところであった。

第四章 「半七捕物帳」シリーズの受容と再生

—宮部みゆき『本所深川ふしぎ帳』『幻色江戸ごよみ』—

・概要

ミステリ作家として人気の高い宮部みゆき（1960-）による江戸の怪談を利用した時代小説作品として表題の『本所深川ふしぎ帳』（1991）、『幻色江戸ごよみ』（1998）に収められた短編を論じる。宮部がたびたび言及している岡本綺堂（1872-1939）の『半七捕物帳』シリーズ（1917-1937）との共通性と差異を析出し、宮部作品の特質を明らかにする。町奉行所の与力・同心のもとで働いた「岡っ引き」の老人を設定してその人物が筋立ての鍵となる構造、その人物像を具体的に摂取しているだけでなく、エピソードの利用が見られることを指摘する。これらのモチーフの踏襲に加えて、さらに綺堂には諸芸能を「聴く」経験を通じてその作品で聴覚を強調するという特徴が指摘されることをふまえ、宮部もまた作中で聴覚の効果を重視した「聴覚型」作家であることを論じる。

いっぽう、江戸の風俗を同時代の読者に伝えようとした綺堂とは本質的に異なる点として、宮部には舞台を江戸に置きながらも懐古的な意識がなく現代と共通する主題を書いているとする。「半七捕物帳」が怪異を近代合理性に基づいて再解釈しているのに対し、宮部におけるそれは①明確な解釈を提示しない、あるいは、②登場人物の現在において進行し、登場人物の体験として再構築されるという特徴を備えているとし、こうした特徴が90年代における「実話怪談」の影響に基づくものと見なす。また、現代を舞台とする社会派ミステリと時代小説との双方を手がける宮部においては、ジャンルの選択はその時代背景によって表現できる題材によって決定づけられることを踏まえた上で、現代物と時代物に共通する装置としての「少年」「少女」に着目、先行論を踏まえつつ、特に時代小説においては少年少女の視点が怪異を「咀嚼」し、現代読者に架橋する機能を果たしていることを述べる。

・評価

流行作家が、江戸の怪談を素材に、近代の時代小説のさまざまな要素を継承しつつも、いかにして現代の読者に広く受け入れられる作品を作りあげたのかを多角的にあきらかにした章といえる。

第二部のまとめにおいて、杉本と宮部に共通する前提として、バブル経済の崩壊、および、大衆の生活における個人化の進行が指摘され、そのことが両作家における「力を持たない町人たち」への注目に繋がったとする。この点が若干わかりにくく、「個人化の進行」と「力を持たない町人たち」との相関が明瞭ではないが、これは80年代におけるポストモダンの潮流すなわち「大きな物語の終焉」ということを言おうとしていることが口頭試問で確認された。

もう一点、ここで取り上げた二作家は、第一部の二作家の作品と比較して「女性像に対する固定観念の革新にこだわっていない」として、「一律的な「女性性」」に回収されない多様性の発揮が指摘されている。その通りではあると思うが、その背景として、日本の80年代フェミニズム、すなわちバブル景気に支えられたいわゆる「女の時代」との相関、あるいは、

世界的なポストフェミニズムの傾向との同時代性に言及してもよかったかもしれない。時代背景ということでは、80年代の「江戸ブーム」（つまりこれもある種の「反近代」であるかと思うが）にも触れる必要があっただろう。

第三部 女性問題への注目——00年代以降にデビューした作家たち

第五章 女性の連帯の場としての吉原像—宮木あや子『花宵道中』—

・概要

時代小説においても舞台背景の歴史考証は相応に尊重されるのが一般的であるのに対し、史料にしばられることなく現代の若い読者のイメージするところに従って自在に歴史的な要素を利用したエンターテインメント作品が登場してきているという。そうした作品を代表するものとして、連作小説から、漫画化、さらに映画化もされて多くの読者に支持された宮木あや子（1976-）の『花宵道中』（2006）および関連する一連の短編を取りあげる。吉原遊郭の妓楼山田屋を舞台とし、その抱えの遊女たちを描く一連の作品で吉原を作品世界として設定したのは、R-18 文学賞応募作であった表題作に求められた性という課題に加え、近代の自我、人権のような概念がない時代のこととして、人の情を直截に描き得るからだという作品解説を首肯する。そこで現代女性、とりわけ社会的格差が拡大するなかで「負け組」とされた女性たちの孤独や生きづらさに寄りそえる設定と人物造型を行っていること、それが同じ時期の純文学でも追求されたテーマであったことを指摘する。

そのうえで、従来の男性の視点から女性同士が競い争う場として描かれてきた吉原を、史実に反して女性楼主を設定し、遊女たちが助け合い、連帯する場に変容させたことに、現代女性のニーズを反映したこの作品の新しさを見いだす。そこにこの作者が80年代の少女小説を読むことで作家として自己形成したことの影響を看取り、大衆小説としての少女小説と時代小説のジャンルの越境があることを指摘する。

・評価

吉原の遊女の中でも「負け組」の女性たちを取り上げてその群像を描いている点が、男性の競争社会の陰画であった『吉原炎上』とは異なっていること、また、現実の格差社会における仁藤夢乃などの取り組みをも思わせる女性たちの連帯が描かれていることを述べ、作家の少女小説受容とも関連づけて論じる。

論旨についてはそのとおりだと思うが、おそらくは、これまでに論じられてきた作品群と比べて本作はもっとも浅薄なものだと推測され、それゆえにこの章は他と比べて論述に厚みが乏しい。社会背景との相関もそのとおりだろうとは思いますが、（他の要素への言及が少ないために）やや、素朴な反映論に陥っているようにも思われる。

以下、いくつか補足できそうな視座を挙げる。本作は、ここまでに論じられてきた諸作品と異なり、明確な典拠を持たない。ここまでの各章を構成する要素として、典拠との比

較を通じた当該作の新奇性に論述が割かれていたことは、各章の学術性の担保にもなっていた。それに替わるものとして、以下のようなことが想定できるのではないか。①メディアミックスの実態や背景、あるいは、アダプテーション作品と本作との対照、読者（オーディエンス）研究など。②『吉原炎上』以外の吉原を描いたメジャーな作品との対照、とりわけ、安野モヨコの漫画『さくらん』（2001～）と、蜷川実花によるその映画化（2007）の検討は、本作と発表時期に近いこともあり、必須だったのではないか。③「女の園」における女性同士の連帯ということでは、たとえば、田辺聖子の『むかしあけぼの』なども該当するのではないか。④氷室冴子については、より詳細な考察が必要だろうと考える。

第六章 ノスタルジーの幻想を超える女性画人像—朝井まかて『眩』—

・概要

浮世絵にとどまらず、今や日本美術を代表する絵師として国際的にも高い人気を誇る北斎の画業を継承する娘お栄こと絵師の葛飾応為を扱った先行作品群と対照して、本作の特質を明確化する。まず、評伝である飯島虚心『葛飾北斎伝』（1893）および久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』（2015）に依拠しつつ、判明している限りの史実を整理し、そのうえで、杉浦日向子『百日紅』（1983～1987）、山本昌代『応為坦坦録』（1983）、澤田ふじ子『野狐』（1984）に描かれた応為像の特徴や変遷を踏まえ、それらとの対比において『眩』の特質を捉える。落款の残る作品が少ないというだけでなく、その伝を伝える史料も乏しいだけに、現代作品においてその像を描く際の自由度は高く、時代に応じてさまざまな応為像が描かれてきた。本章ではそれらを概観しつつ、朝井のお栄像が、結婚よりも画業への情熱を優先させ、父北斎の絵を文字通り陰ながら支えることに努めながらも才能を開花させたことを強調するものになっていることを論じる。

具体的には、2014年2月に太田記念美術館において企画展「葛飾応為『吉原格子先之図』—光と影の美」が開催され、それが執筆の契機となっていることから明らかに、本作は、応為作とされる作品群の成立背景を年代順に描く体裁を取ることで、芸道小説の系譜に実在の女性画家を加えたと見なす。また、家族の問題、とりわけ介護問題を交差させることで、現代の特に女性読者の共感を促すと分析している。こうした要素に由来するリアルな人物造型が先行作品からの差異であるとする。

・評価

この作品を芸道小説の系譜に置くのは興味深い視点で、作者がその前に手がけた『恋歌』（2013）、『阿蘭陀西鶴』（2014）からの深化も論じられたのではないか。その際、男性主人公がひたすらその芸の道に邁進する姿を描かれたのに対し、それに専心し得ない立場におかれる女性の現実を映しだした点も指摘できたと思われる。

気になった点としては、杉浦日向子『百日紅』の特徴はこれが漫画作品であることに由来する部分も大きいと思われるので、その点に言及が必要だったかと思う。また、『眩』は芸道小説であると同時に、絵画の成立譚であり、また女性画家の伝記小説でもある。原

田マハの絵画小説が多く読者を獲得していることとの相関や、あるいは、女性を扱った従来の芸道小説において画家を取り上げるものがなかったことについては、リンダ・ノックリンに代表される女性が画家になることの困難をめぐるフェミニスト研究に目配りしてもよかっただろうと思う。

各部のまとめ・終章

・概要

本論文では各部それぞれ二章からみえるものをまとめたうえで、全体を概観することで得られた結論を終章にまとめている。第一部では古典文学やその受容、従来の時代小説の型を脱した、自立的で強い主体性をもつ女性像を確立したことを述べる。第二部で取りあげた作品は80年代以降の一般大衆個々のあり方が文学の主題となる時代にあつて、社会の下層に生きる人びとに目が向けられること、そこに一律の「女性像」の革新への関心は見られず、視座が多様化していることを見いだす。第三部の作品では一転して、現代女性の抱えるさまざまな問題が時代小説のかたちをとって俎上にあがっていること、それが第三波フェミニズム運動と共通することを指摘する。そうした現代性では共通するものの、史実への態度や歴史表象のあり方そのものは多様化しているとする。

これらをふまえ、全体を総括する。まず問題意識の第一に掲げた戦後の女性作家による作品の豊かさ、多様性が多岐にわたっていることを一定程度提示できたとする。そして第二に掲げた、女性が抑圧されていた時代をなぜ女性作家があえて舞台として創作するのかという問いに対しては、従来の時代小説が男性による男性の歴史のロマン化であったことを受け、それに対抗するものであると捉えることを提唱する。女性作家の活躍自体が、男性中心の文学世界における挑戦であったのは純文学の世界だけでなく、大衆文学でも同様であり、男性の視点で描かれてきたことで生じる歪みに異議申し立てするものとして女性文学の成果として評価できるとまとめる。

・評価

本論文は、時代小説総体の研究さえも乏しいなか、手探りで女性作家たちの模索の全体像を三期に分けてとらえようとしたものである。各論は作品論の方法を採っているが、それぞれの作品についての学術的体系的な論考が乏しい現状にあつては、必要な手続きであったと言える。具体的には、史実や典拠や先行作品との差異を明らかにすることで、作品の卓越性を示す方法が一貫して採用されており、これは時代小説というジャンルにおいては有効かつ必須の方法である。調査は精緻で、作品読解も概ね妥当だと見なされる。時代状況やフェミニズムの状況との相関にも言及されており、これは、通俗小説が純文学以上にダイレクトに時代状況を反映すると考えられるがゆえの必然であり、「女性文学」を標題に掲げる本論には必要なことであるだろう。ただ、やや、素朴な反映論に陥りそうな気配が感じられるのと、個々の典拠研究や本文読解が詳細であるのに対して、総体的にいわゆる大文字の文学史への目配りが若干弱いように思われる。今後の課題であるだろう。それでも、それらを俯

瞰したうえで得た、男性の歴史を男性の手で再生産するものであった時代小説というジャンルのありかたそのものへの異議申し立てが女性による時代小説であったとするまとめは炯眼といえよう。

全体の構成は、50年代・80年代・00年代を指標とした編年体の体裁となっているが、その実、取り上げられている作品は、平岩作品をのぞいて、もっぱら90年代から00年代に集中している。つまり、本論考が主張する「多様性」は、いわゆる純文学の分野においても女性作家の活躍が目立つようになった現代文学における傾向の範疇の事柄であるように思われる。たとえば、平岩弓枝を女性時代物作家の嚆矢とし、その前史として有吉佐和子や吉屋信子について点綴し、そのほかの作品群については90年代以降の豊穡さとして示す、といった構成もあり得たかもしれない。

また90年代以降の女性による時代小説を論じるにあたっては、シスターフッドの問題に言及するのであればなおさら、氷室冴子の存在は外すことができないのではないかと考える。これについても、今後の研究課題に加えてほしい。

もう一点、大衆文学を研究するうえで導入してほしい視点としては、初出誌が対象とした読者層を分析の視点に加えることである。本論文でも各章に初出は明記されているものの、各誌がおもに女性読者を想定しているのか男性も想定しているのか、女性作家がどう位置づけられているのかで変わってくる部分もあろう。それとも関わって、読者が共感する対象としての「庶民」という概念を導入すると問題の輪郭がなお明確に見えてくるのではないか。下層民あるいは大衆という集団を指す語では見えなくなってしまう、個としての「庶民」として作中人物を捉えることで、それぞれの時代の「ふつうの女性」の状況と重ねやすくなり、作品と読者をつなぐ視点として有効であろう。

論文全体の評価と審査結果

本学学位規則により、最終試験として2022年9月20日に公開の場で口頭試問を行った。李紹楠氏からは論文内容に関して十分な説明がなされ、主査・副査および出席者の質問に対しても的確な回答がなされた。女性作家たちが、旧来の男性作家による時代小説の典型を脱してその幅を広げたことを明らかにし、そうした女性作家の貢献は「庶民の哀歓を描く」とされる時代小説というジャンルがそうした性格を獲得していくうえで大きな役割を果たしているであろうという筋道が明示されてきたといえる。以上の検討の結果、審査小委員会は最終試験の結果を合格と判断した。